トピックス

ヴィクトリア朝ミドル・クラスのインド生活

F. A. Steel and G. Gardiner, *The Complete Indian Housekeeper and Cook* (1888), edited with an Introduction and Notes by Ralph Crane and Anna Johnston (Oxford: Oxford University Press, 2010).

新井　潤美

> A piano, where carts can be used, requires a cart to itself, and should be swung to avoid being injured by jolting. If the road is only a camel-road, the piano must be carried by coolies, of whom fourteen or sixteen will be needed.
>
> (Chapter XVI "On the Hills", p. 194.)

インド駐在のイギリス人の家族は四月頃から、丘陵地帯に避暑に出かける。上の引用はその際どんなものをどのように運ぶべきかというアドバイスの一部である。「主婦、子供が三、四人、そしてイギリス人の乳母」が避暑に行く場合は、ラクダ十一頭に、衣服、家具、食器、調理器具、ミシン、浴槽などの荷を積んで行くことが奨励される。あるいは荷車が使えるのならば、これらの荷物は荷車四台を用意して、「それぞれの荷車に往きは雄牛三、四頭、帰りは雄牛二、三頭」にひかせればよいと述べ、ピアノを運ぶには荷車がまるまる一台必要だとつけ加えている。数ヶ月の避暑にしてはかなり大がかりな移動だが、ここで著者が想定している読者は、裕福な上流階級ではない。公務員の給料でやりくりするために様々な倹約を強いられ、「ルピーの価値が下がった今の時代には、子供をイギリスに帰す経済的な余裕が無い」（第十七章、一九六ページ）ミドル・クラスの家庭に向けて書いているのである。費用がかさみ、手間がかかっても、イギリス式の生活を変えようとせず、ミドル・クラスのステータスを示すピアノ（と言ってもこの時代には、月賦制度の普及で、ロウワー・ミドル・クラスの家庭でもピアノを持つことができた）も、どんなに苦労しても山の上まで運ぶのである。ピアノと言えば、すでに一八二七年に、トマ

ス・フッド（一七九九〜一八四五）が「移民からの手紙」という滑稽短編小説において、アフリカに渡ったミドル・クラスの家族が、川を渡っている途中に荷物をほとんど流されるが、「グランド・ピアノと子供たちのおもちゃ」だけは助かってほっとするというエピソードを面白おかしく書いている。ノエル・カワード（一八九九〜一九七五）が熱帯地方でも昼寝をしないで真っ昼間に散歩に出かけるイギリス人を皮肉ったコミック・ソング「狂犬とイギリス人は真昼の太陽の下を歩く」（一九三一年）や、まわりで内戦が起こっているのに平然と午後のお茶を飲んでキュウリのサンドウィッチを食べる、イーヴリン・ウォー（一九〇三〜六六）のアフリカ在住のイギリス人外交官たち（『黒いいたずら』、一九三二年）等、エキゾチックな環境の中でかたくなに自国の習慣を貫くイギリス人の姿は常に笑いと共に描かれてきた。一八八八年から八九年にかけてインドで出版され、その後エジンバラ、そしてロンドンで版を重ねた『完璧なインドのハウスキーパーと料理人』も、インドでどうやってイギリスのミドル・クラスの生活を続けていくかというハンドブックである。しかしこれはたんに「インド版ビートン夫人の家政書」に終わっていない。二十五歳の若さで、主婦としてもまだまだ経験の浅いイザベラ・ビートンが、他の書物や雑誌から情報をかき集めて編纂した『家政書』（当時のこの種の書物としては決してめずらしくない手法だが）と違って、『完璧なインドのハウスキーパーと料理人』は著者のフローラ・アン・スティール（一八四七〜一九二九）とグレイス・ガーディナー（ 一八四五〜一九一九）がそれぞれインド駐在の公務員の夫と共に二十年以上インドに暮らした経験に基づいた、生活の知恵を満載した実用書である。そのため、本書は当時のインドにおけるミドル・クラスのイギリス人の社会の貴重で興味深い資料ともなっているのである。

共著と言っても、書いているのは主にスティールであるが、彼女は公務員の主婦にとどまらず、社会活動に積極的に参加し、地元の言葉を覚え、インドの女性の生活の向上に貢献した。インド人への接し方がパターナリスティックであることは否めないが、地元の女性に敬愛され、自伝によると別れるときには「三百人ほどの、ベールをかぶった女性が鉄道の駅に集まってくれた」という（本書の「序文」に引用されている）。こうしてイ

ンド人の中で暮らした経験から、様々な助言が生み出される。インドの夏を乗り越えるための衣服、冷たい飲み物など、猛暑の日本でもぜひ試してみたくなるようなものだ。また、

> Instead of taking exercise, we drink hot tea on an empty stomach, and follow this by a hot bath, which relaxes the muscles and enfeebles our nervous system, and then we try to remedy this with beer or wine, which only irritate the nerves more!
>
> (Chapter XVI, “On the Hills”, p. 190.)

などというくだりを読むと、このしっかりとした no–nonsense の女性に、こちらが叱られている気にさえなる。

本書は伝統的な「異国のイギリス人」ものとして楽しめるだけでなく、ヴィクトリア朝のミドル・クラスの生活、インドの使用人事情、インドにおけるイギリス人社会といった、実に様々な情報を楽しむことができる家政書である。